

「光輝（かがやき）」プログラム		幼小接続期	3歳児	
3歳児で育成したい資質・能力（O子どもの姿 →教師の援助）				キーワード
①	【人間味溢れる豊かな感覚】 身近なものや人とかわる中で、面白さや不思議さなどを豊かに感じるとともに、自分とは異なる感じ方があることに気付く。	○周りの環境に、心を動かしてかわる。 ⇒大人の価値判断（大人からは無意味に思えたり危険や汚いことに見えたりするようなこと）で禁止や制約をせず、感じている不思議さや面白さに共感する。 ○友達とかわる中で、そっと他者の傍に寄り添ったり、一緒に大笑いしたりするなど、言葉はなくても友達と心を通わせる。 ⇒友達と心を通わせている姿を見守ったり、子どもたちの思いに寄り添ったりする。		心動かす
②	【自ら学ぼうとする姿勢】 遊びや生活の中で、自分のしたいことやできることを見つけて取り組もうとする。	○自分がやりたい遊びを見つけて、やってみようとする。 ⇒遊びの楽しい雰囲気を作ったり、子どもとの信頼関係を築いたりし、子どもたちが安心して園生活を過ごせるようにする。 ⇒子どもたちが興味あるものを一緒に見つけたり、遊びのとりかかりを支えたりする。 ○自分の遊びの楽しさを感じたり、満足感を味わったりする。 ⇒子どもたちがやっている遊びを受け止め、認めることで、子どもたちが「楽しい」「もっとやってみよう」と意欲をもてるようにする。		安心 意欲
③	【粘り強く取り組む力】 自分なりの目的に向かって、じっくりとやってみる。	○やりたいと思ったことを、実際にやってみる。 ⇒やりたいことができるように最初の一步を支えたり、遊んでいる姿を見守ったりする。 ○その遊びや活動の楽しさや面白さを十分に感じ、遊んだことへの満足感を味わう。 ⇒遊びや活動に取り組む時間や空間を十分に保障する。 ⇒子どもたちの思いを受け止め、自分のやりたい遊びができたという満足感を味わえるようにする。		やってみる 満足感
④	【コラボレーションする力】 友達と意思を出し合いながら、力を合わせて遊びを進めるようになる。	○自分の思いを教師や友達に伝えようとする。 ⇒一人一人の子どもの思いに寄り添ったり受け止めたりし、子どもたちが安心して自分の思いを伝えられるような風土を作る。 ⇒友達に思いを伝えようとしている姿を見守ったり、子どもの言葉にならない思いを教師が代弁したりして、友達に自分の思いを伝える経験を支える。 ○教師や友達と一緒に遊ぶ心地よさを感じる。 ⇒教師や友達と一緒に過ごす心地よさを感じられる雰囲気や機会を作ったり、友達と一緒に遊ぶ心地よさや楽しさに共感したりする。		思いを出す 一緒に遊ぶ心地よさ
⑤	【複眼的に思考する力】 様々なやり方や考え方に触れる。	○友達や教師がしていることや考えていることを見たり聞いたりするなど、様々な考えに触れる。 ⇒いろいろな考えがあることを教師が認める姿を見せる。 ⇒集いの中で、いろいろな思いや考えに触れる機会を作る。		様々な考えに触れる
⑥	【知識と知識を関連づけながら深く追究する力】 今まで経験したことを生かし、遊びや生活に取り入れてやってみようとする。	○いろいろな体験をしながら遊ぶ。 ⇒子どもたちの経験や知識の土台となる、多様な体験の機会を保障する。 ○これまでの経験を生かして遊ぶ。 ⇒これまでの生活の中で得た経験を思い出すヒントを出したり、経験を活かして遊んでいる姿を教師が言葉にしたりする。		多様な体験をする 経験を生かす
⑦	【論理的に問題を解決する力】			

3歳児のめざす子どもの姿

身近なものや人に興味関心を持ち、自分からまたは教師と一緒にかわりながら、自分の思いを出して思うままにやってみようとする子ども。

時期	4～6月	7月～9月	10月～12月	1月～3月	
関連する活動	<p>【色水遊び】</p> <ul style="list-style-type: none"> 身近にある草花に触れ、その美しさやかわいさを感じる① 自然物によって色が違うことに気付く。①③⑥ 友達と一緒に作り、互いの色水を見せ合う。②④ 	<p>【色水・石けん泡遊び】</p> <ul style="list-style-type: none"> いろいろな色の色水を作って遊ぶ。①③⑥ 石けん泡を作ったり、できた泡を先生や友達に見せる。②③ 色水と石けん泡を混ぜて、色が変化することを知る。③⑥ ふわふわの泡を作ろうと沢山石けんを入れたり、混ぜたりする。③⑥ 			
	<p>【しゃぼん玉遊び（泡遊び）】</p> <ul style="list-style-type: none"> 泡の感触や泡がプクプクと増えていく様子などを見て、色々なことを感じて楽しむ。①② 	<p>【砂場遊び】</p> <ul style="list-style-type: none"> 泥団子を作ったり、土や泥や身近な草花で作ったごちそうを作ったりして教師に食べてもらったりなどを楽しむ。②③④ 異学年の影響を受けて、樋をつなげて水を流そうとする。③⑤⑥ 全身で泥水に浸かって、教師や友達とその気持ちよさを伝えたり、共有したりする。②④ 			
	<p>【砂・水遊び】</p> <ul style="list-style-type: none"> 水や砂などの素材に触れ、その感触を味わう。①③ 水の冷たさや温かさを感じながら、心地よさを味わう。①②③ 繰り返し同じものを使って遊ぶ。③ 異学年の影響を受けて、砂場の色々な場所に砂を掘って川を作って遊ぶ。②③⑤ 	<p>【水遊び】</p> <ul style="list-style-type: none"> 水たまりに浸かったり、水鉄砲を发射したりして、水の冷たさや心地よさを味わう。① 友達と一緒に歓喜をあげながら楽しむ。④ 樋をつなげて水の流れや動きを見て楽しむ。①② 			
	<p>【ふれあい遊び】</p> <ul style="list-style-type: none"> 教師との信頼関係を築く。② ふれあいのある手遊びやゲームなどを通して、友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じる。④ 友達に親しみを感じ、じゃれあったり笑い合ったりする。④ 	<p>【異学年とのかわり】</p> <ul style="list-style-type: none"> 年長児にお化け屋敷に招待してもらい、お化け屋敷で遊ぶことを楽しむ。④⑥ 泥団子づくりや色水づくりなどを異学年の友達に教えてもらう。④⑥ 			
	<p>【虫探し・虫とのふれあい】</p> <ul style="list-style-type: none"> 身近にいる生き物を捕まえたり逃がしたりする。②③ 生き物の面白さや不思議さを感じる。① 生き物を死なせてしまう。①⑥ 身近にいる生き物（カブトムシの幼虫）のお世話をすることを楽しむ。①② 	<p>【製作遊び】</p> <ul style="list-style-type: none"> 廃材を使って、作りたいものを作る。①③ 年長児に教えてもらったり、友達が作ったものを真似て作ったりする。④⑤ 色を塗るなど、自分なりに工夫しながら作る。①⑥ <p>【虫探し・虫とのふれあい】</p> <ul style="list-style-type: none"> 虫取り網や虫かごを使って、バッタや蝶々を捕まえたり、逃がしたりする。②③⑥ 異学年の友達の影響を受けて、レンガや植木鉢の下にいるダンゴムシやミミズを探したり、捕まえたりする。③④⑥ 成虫になったカブトムシにエサをあげてお世話をしたり、触ったりして生き物とのふれあいを楽しむ。②⑥ 生き物とのかわり方を考える。①⑥ 			
評価方法	エピソード記録				

「光輝（かがやき）」実践記録		幼小接続期	3歳児
事例	しゃぼん玉遊び（泡遊び）：「先生見て～！あわあわアイス」		
時期	5月下旬～6月上旬	育成された資質・能力	⑥
子どもの様子（下線は教師の環境援助）			
<p>子どもたちがそれぞれのカップとストローを使って、しゃぼん玉を作ろうとして遊んでいるとn児が教師のところへ来て「見てみて！あわあわができたよ！！」とカップの中にあるしゃぼん玉液がブクブクと膨れて今にも溢れそうになっていた。<u>それを見た教師が「うわ～！泡がいっぱいブクブクになってるね！」と驚いたように言う。</u>その声を聞いたm児も「私もする！！」と言ってn児の真似をしながらブクブクとし始めた。「うわ～！！いっぱい泡になったね！」とm児の泡を見て教師が言う。m児は、ニコッと微笑みながらブクブクし続ける。教師も「先生もやってみようっと！」と言い、n児やm児の真似をしてブクブクと泡を作る。<u>すると回りで遊んでいた子どもたちも「うわ～！」と声を上げながら教師が作った泡がどんどんと大きくなっていく様子を見ている。「でっかいね！」と口々に子どもたちは言いながら、教師の作った泡をツンッと触る。その様子見た教師は「どんな感じだった？」と聞くと「ふわふわだ～！」と口々に感じたことを言いながら泡を触る。そこに一生懸命ブクブク吹き続けてきたm児がやってきて「先生見て～！あわあわアイスができたよ。食べてみて」と持ってくる。教師は「うわ～！美味しそうなアイス！いただきまーす！」と言ってアイスを食べる真似をする。</u>するとそれを見ていたn児やs児が「わたしも食べたい！」「ぼくも食べたい！」と言い、二人も一緒になって食べる真似をし始める。教師が「どんな味だった？」と聞くと「ふわふわの美味しい味」とn児が嬉しそうに答える。そのやりとりをm児も嬉しそうに見ていた。</p>			
教師の環境援助			
先生や友達の影響を受けながら、やってみたいことが思いっきりやることができる教師のかかわり			
<p>事例1や事例2では、子どもたちがブクブクとカップの中で泡を作っている様子を教師も見守りながら、「先生もやってみよう！」と実際に教師も一緒にやってみたり、「うわ～！泡がいっぱいブクブクになってるね！」と驚いた様子で話をしたりすることで、周りで見ていた子どもたちもしゃぼん玉遊び(泡遊び)に興味をもち、実際にやってみようとする姿が見られた。教師も一緒になって楽しそうにやってみたり、子どもたちの思いに共感したり、その思いを周りの子どもたちにも広げたりすることで、子どもたちが教師や周りで遊んでいる友達の影響を受けて自らやってみようとしたり、繰り返し遊んだりする姿へとつながったのだと考える。このような教師のかかわりが、横断的な知識への育みにつながっていくのだと考える。</p>			
事例	しゃぼん玉遊び（泡遊び）：「見てみて！泡が飛んだよ！」		
時期	5月下旬～6月上旬	育成された資質・能力	①②
子どもの様子（下線は教師の環境援助）			
<p>ブクブクと膨らませた泡をたくさん作って楽しんでいるme児。たくさん作った泡がポトリと地面に落ちた様子を見て、「見てみて！先生、あわあわが下についたよ！」と言い、土の上に残っている泡の塊を指さす。<u>教師は「おお～！土の上に泡が残ってるね！」と少し不思議そうに言う。</u>それを見たS児は自分で作っていた泡の塊をふーっと息を吹きかけて地面に落とし「見てみて！Sのも下に落ちたよ」と教師に言う。<u>教師は「ほんとだ～！ふーって吹いたら沢山落ちてきて、面白いね」と言う。</u>その様子を見ていたn児やm児も同じように息を吹きかけ、泡を落とす。沢山飛んだ泡の様子を見たS児が「見てみて！いっぱい泡が飛んだよ！」と飛んだ泡の様子を見て興奮したように言う。n児も「なんか雪みたいで面白いね」と言い、その後もみんなで繰り返し泡を飛ばして遊んでいた。</p>			
教師の環境援助			
子どもたちの気付きや思いに共感しながら、その場ですぐに受け止められる教師のかかわり			
<p>事例1や事例2では、「先生、見てみて～！」と自分の感じたことや面白いと思ったことを教師に伝えようとする姿が多々見られた。子どもたちの中での“みてみて”という誰かに伝えたい思いをそばで教師がしっかりと受け止めることで、さらに“伝えたい”“やってみたい”という意欲が高まったのではないかと考える。また、子どもたちの面白いと思った気付きをしっかりと受け止める存在がすぐそばにいて、自ら興味をもったことにかかわろうとする姿へとつながったのだと考える。こうした教師のかかわりが、躍動する感性の育みにつながっていくのだと考える。</p>			
事例	しゃぼん玉遊び（泡遊び）：「きもちいい～！」		
時期	5月下旬～6月上旬	育成された資質・能力	③④

子どもの様子（下線は教師の環境援助）

しばらく泡を飛ばして遊んでいると、今度はm児が落ちた泡をツンツンして触り始めた。「みて！ずっとあわあわあるよ！」とm児が言うと、それを聞いたn児やS児も泡をツンツンと触り始める。S児が泡を掌に持ち上げ「先生も触ってみ！きもちがいいよ」と言う。教師も一緒に触りながら「ほんとだ！ふわふわで気持ちいいね！」と言うと「でしょ！」とS児が言う。教師はもっと泡の感触を楽しんでほしいなと思い、たらいを出してその中にしゃぼん玉液を入れた。それからそのたらいにブクブクと泡を作り始めた。するとそれを見ていたm児やS児が「きゃ～！！」と大きな声を出しながら喜ぶ。「触りたい！触りたい！」とS児が大声を出しながら、泡を触り始める。触ったS児をじっと見るm児。すると「うわ～！きもちいい～！」と周りにいた友達に伝える。教師も「ええ～！ほんと？」と言う。それを聞いていたn児やm児も大きな泡を触り始める。「きもちがいい～！」と満面の笑みで泡を触る。「見てみて！ぼよんっぼよんってしてるよ」と言いながら、泡を壊さないように触るm児。それをみたS児やn児も真似てやりはじめ、その後、繰り返し泡の感触を楽しむ姿が見られた。



教師の環境援助

子どもの興味関心に応じてタイミングを逃さない教師の環境援助

事例1や事例2では、子どもたちは、しゃぼん玉遊びをする中で、しゃぼん玉ではなく“泡”に興味をもってかかわる姿が見られた。子どもたちは、泡をツンツンと触ったり、拾ったりして、泡の感触を楽しみ始めている姿が見られた。その子どもの姿から教師は、そこからさらに泡の感触をダイナミックに感じて楽しんでほしいと考えた。そこで、事例3のように、より泡の感触が楽しめるようにたらいを出し、その中で沢山の泡を沢山作ることで、子どもたちは泡の動きや感触を楽しんだり、友達と一緒に泡を持ったりしながら、カップの時よりもダイナミックに泡の感触を楽しむ姿へとつながった。事例1や事例2のように、遊びの流れや子どもの姿を教師がしっかりと見取り、子どもの興味関心がどこに向いているかの様子を逃さず環境援助をすることで、自分の思いを出しながらしたいことを思うままにやってみようとする姿が見られたのだと考える。こうした教師の環境援助が、レジリエンスの育みにつながっていくのだと考える。